

日本における犯罪被害者の法的救済の

歴史と理論

おおたに みちたか
大谷 通高

本論の主題は犯罪被害者の苦しみとその救済であり、論じたのは犯罪被害者の救済理論と、日本における犯罪被害者の法的救済の歴史である。

そして本論が問題としたのは、犯罪被害という事象が加害－被害という人間関係を織り込んだものであるということだ。犯罪被害者としての体験や苦しみは、加害者という他者を前提とした「害を与えられた」という侵害の体験に基づいている。この問題が重要なのは、犯罪被害者が抱える苦しみが、被害者個人にとどまらず、加害行為をなした者にもかかわるものでもあり、犯罪被害者の救済が、単に被害者の置かれている状況を改善するという観点だけでは不十分であるということを明らかにするからだ。

本論は上記の視点から犯罪被害者の法的救済の歴史を記述・考察した。歴史については、戦前期から 2000 年までの犯罪被害者の法的救済を対象として、これまでの法的救済が、加害－被害という侵害関係を内在した犯罪被害について、どのような問題として捉え、それにどう答えてきたのかを記述・考察した。これにより、これまでの犯罪被害者の法的救済が、刑事司法にかかわる政策の一環として捉えられ、犯罪という不正を正すためのもの、加害者の教化といった犯罪予防のためのもの、加害者の処遇との不均衡を是正するといった刑事政策を合理化するためのものといった、犯罪という侵害と関連する形でその意義が設けられてきたことを確認した。

そして救済理論については、犯罪を人間関係の侵害と捉える修復的司法論、とりわけハワード・ゼアの理論を参照して、犯罪被害者の苦しみを加害－被害という侵害の関係から論定した。これにより加害－被害関係の非対称・不可逆的構造によって「被害者である」という実存的な苦しみが犯罪被害者に生じていることが明らかとなった。この苦しみにたいする救済については、ゼアの「解放」を基底とした救済観を検討することで、被害者が被害者でなくなる事態を提示した。